萬葉表記論

稲岡耕二著

塙書房刊

稲　岡　耕　二（いなおか・こうじ）

略　歴　　昭和4年東京都に生まれ，都立第五中学・第一高等学校をへて，昭和28年東京大学文学部国語国文学科を卒業。
武庫川女子大学講師・山口大学助教授・東京大学助教授などをへて，現在東京大学教養学部教授。

近　稿　「人麻呂『反歌』『短歌』の論」（『万葉集研究』第二集。塙書房昭和48），「人麻呂における『動乱調』の形成」（『万葉集研究』第五集。塙書房昭和51）など。

万葉表記論

昭和51年11月30日　第1版第1刷

定価 9,600 円

著　者　稲　岡　耕　二

発行者　白　石　静　男

発行所　塙　書　房

〒113　東京都文京区本郷三丁目6-10
TEL　03(812)5821・振替東京0-8782
西田整版・樺島印刷・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替いたします。　3091——6940

目

次

第一篇(上)　人麻呂歌集の論……九

第一章　人麻呂歌集表記の「原始」的性格……一一

一　人麻呂歌集旋頭歌の本文と訓……一一

二　万葉集における「ガ」(主格)の「読添え」……二一

三　万葉集における「ノ」(主格)の「読添え」……三三

四　人麻呂歌集歌表記の「原始」的性格……四三

五　問題と方向……五四

第二章　人麻呂の表記の展開……五七

——「将」の用法から——

一　字義と語義との間……五七

二　「ム」の用法と其の表記……六〇

三　歌集の「将」……七一

四　人麻呂作歌の「将」……八一

五　「ラム」「ケム」の表記……八七

第三章　表記史と文学史との交渉……九七

一　木簡に見る宣命書……九七

二　人麻呂と和歌の表記……九九

三　表記史と文学史との交渉……一〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一篇(下)　人麻呂歌集の論・補遺……一〇九
第一章　歌集表記の研究の概観……一一
第二章　二類の表記……一二五
一　問題の所在……一二五
二　書式の相違と助詞省筆……一三七
三　旋頭歌における二類……一三六
第三章　略体・非略体表記の性格……一四九
一　非略体表記の性格――助詞の表記を通して――……一四九
二　略体は「略式」表記か……一五八
三　補説・五つの群と特殊表記……一六七
第四章　人麻呂歌集歌の筆録とその意義……一八五
一　人麻呂歌集歌の範囲……一八五
二　人麻呂歌集歌筆録の時期……二〇一
三　人麻呂歌集歌筆録の意義……二〇七
四　モの甲乙の書き分けと人麻呂……二一一
結……二一四
第二篇　巻五の論……二一七
第一章　序論……二一九

一　用字の係属決定の可能性と条件……二二九
二　単独筆録説への疑問……二三三
三　梅花歌の筆録……二三七
四　巻五表記の位相……二三四

第二章　各　論……二三九

一　報凶問歌と日本挽歌の用字……二四〇
二　七九六歌の用字の異質性……二四八
三　モの甲乙の書き分けについて……二五三
四　令反或情歌から哀世間難住歌まで……二六二
五　八〇六・八〇七歌の表記……二九四
六　京人の歌……三〇〇
七　旅人歌と房前の返歌……三〇二
八　鎮懐石歌の筆録……三一〇
九　梅花歌三十二首……三一七
十　補説・筑前戸籍の仮名……三三〇
十一　員外思故郷謌両首・後追和梅歌……三三三
十二　遊於松浦河歌群について……三四三
十三　宜の歌と憶良の鄙歌……三六五
十四　佐用比売の歌群……三七二
十五　「書殿餞酒日倭謌」と「敢布私懐謌」……三八〇
十六　三島王歌及び麻田陽春の歌……三八七
十七　敬和為熊凝述其志謌六首……三九二

十八　貧窮問答歌以後……三九七
十九　八〇四歌の異伝等について……四二一
第三章　補論・巻五の編纂について……四二七
一　巻五編纂論の概観……四二八
二　編纂論の問題点……四三〇
三　第一次資料の徴証……四三三
四　第二次資料の徴証……四三五
五　巻五の編纂試論（上）……四四〇
六　巻五の編纂試論（下）……四四七
第三篇　音訓交用表記の論……四五三
第一章　音訓両用の仮名について……四五五
一　用字と表記意識……四五五
二　両用仮名の使用頻度……四五七
三　音・訓の偏り……四六一
四　両用仮名と個人の使用傾向……四六五
第二章　万葉集の交用表記・準交用表記……四七三
一　本章の目的……四七三
二　音仮名間に孤立する訓仮名……四七五
三　訓仮名間に孤立する音仮名……四九〇

四　正訓字と訓仮名間に孤立する音仮名……四九四
五　正訓字間に孤立する音仮名……四九九
結……五〇二
第三章　万葉集における単語の交用表記……五〇五
一　交用表記と仮名の性格……五〇五
二　単語の交用表記例……五〇七
三　仮名の種類……五三一
四　訓釈に疑問ある仮名……五三三
五　特徴ある仮名……五四七
六　単語分割の問題……五五四
七　「射」・「時」・「毛」の場合……五五九
結……五六三
第四章　各論……五六五
一　「吾八思益」考……五六五
二　万葉集における音仮名「八」の用法……五八二
三　「清江乃木筴松原」私按……六〇二
四　「然叙手而在」と両用仮名「而」の訓読……六一〇
人名・事項索引……六二一
後記……六二九

万葉表記論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一篇（上）　人麻呂歌集の論

第一篇（上）に収める論文は、昭和四十八年から昭和五十年にかけて執筆したもので、私の人麻呂歌集の論としては、比較的に新しいものである。歌集表記を国語の表記史の上に位置づけることと、文学史の展開との相関関係を見定めることが、これらの諸論を通じて絶えず念頭を去来した。執筆の時期からいえば、第一篇（下）に収める諸論の後に書かれており、その順序に収載することも考えられるのであるが、旧稿に不備も多く、現在の私の歌集把握の方向と、用字論的骨組みを批判いただくためにはこの方が便宜かと思い、あえて旧稿の前に位置づけることをした。

第一章　人麻呂歌集表記の「原始」的性格

一　人麻呂歌集旋頭歌の本文と訓

一般に、万葉集の表記あるいは用字について言及する場合――文字を主とし、単字あるいは単語中心に「用字」という呼称があるとすれば、「読添え」を含め一文章全体の書き様に及ぶさらに広汎な呼称として「表記」という言葉を選ぶことができる（山田俊雄氏「万葉集文字論序説」万葉集大成第六巻所収。蜂矢宣朗氏「読添えの問題点」解釈と鑑賞昭和四十一年十月）――素材としての文字の研究を別にすれば、A、用字および表記の実態の整理把握　および、B、用字・表記の意義の理解　の二点が重視されるだろう。Bで、「意義」というのは、もちろん、単なる字義を指すわけではない。表記意図とか、表記と文学的な質との関係などに焦点を合わせてのことである。

A・Bの前提として、本文の確定および訓みの確定があることはいうまでもないが、人麻呂歌集歌の訓みは、万葉集内でも特に難訓の個所が多いといってよい。後述するように統一訓の抽出の可能性を否定するような条件さえ考えられぬわけではない。とすれば、Aの実態の整理把握もきわめておぼつかないことになる。

人麻呂歌集については基本的に右のような困難をかかえこんでいるといえるのであるが、それゆえにこそ豊富な問

題性をそこに認めうるし、われわれに可能な範囲内でこれを整理しておくことも必要なことと思われる。幸いにして、古典大系本・古典全集本というように、国語学的研究の成果を十分にとりいれた万葉集の新しい校注本をわれわれは手にしている。それらをもとに、人麻呂歌集の表記上の特徴を、検討しなおしてみたいというのが、本稿に筆を染めた端緒である。旋頭歌を中心とするのは、本文や訓読上の問題に立ち入る場合、歌集歌のすべてにわたったのでは、限られた紙幅内ではとうてい収まらぬ恐れがあることを考慮したためでもある。

①新室壁草苅途御座給根草如依逢未通女者公随（二三五一）
②新室蹈静子之手玉鳴裳玉如所照公乎内等白世（二三五二）
③長谷弓槻下吾隠在妻赤根刺所光月夜途人見点鴨（二三五三）
④健男之念乱而隠在其妻天地通雖光所顕目八方（二三五四）
⑤恵得吾念妹者早裳死耶雖生吾途応依人云名国（二三五五）
⑥狛錦紐片叙床落途祁留明夜志将来得云者取置待（二三五六）
⑦朝戸出公足結乎閨露原早起出乍吾毛裳下閨奈（二三五七）
⑧何為命本名永欲為雖生吾念妹安不相（二三五八）
⑨息緒吾雖念人目多社吹風有数々応相物（二三五九）
⑩人祖未通女児居守山辺柄朝々通公不来哀（二三六〇）
⑪天在一棚橋何将行穉草妻所云足壮厳（二三六一）
⑫開木代来背若子欲云余相狭丸吾欲云開木代来背（二三六二）

巻十一に収録された人麻呂歌集旋頭歌（以下「歌集旋頭歌」という）は右の十二首である（巻七収録歌は後出）。本

文は古典大系本とほぼ等しいが（⑧の「何為」を大系本では「何為尓」としている。このこと後述）、写本によって多少の異同をみる。③の「吾隠在」を嘉暦伝承本では「吾所隠在」としている。次の④の「隠在」は諸本に異同がないので、③も嘉の誤写として「吾隠在」を原本の形とみるべきものと思われる。④の「雖光」は、嘉・古・細・西等に「雖先」とあるが、紀州本などに「光」とあるのが正しいだろう。⑦の「閏」は二例ともに金沢文庫本では「潤」となっている。他の嘉・紀・西など閏であり、文のみの異字を正伝とみるわけにはゆかない。

⑧の「何為」の所、嘉・古・細・無には、「何為念」とする。紀・西・文などに「何為」とある所。嘉・古・細の字面では訓みがたい。嘉でも訓は「なにせむに」とある。古典大系本に「何為尓」とするのは、嘉などの「念」が、本来「尓」であったと考えての誤字説による。しかし⑧は略体歌で「尓」がもともと書かれてあった可能性は乏しいと思う。古典全集本のように「何為」を原文と考える。

右のように写本によって多少の異同は認められるが、右掲のような文字面が原形であったと考えてよいだろう。なお③④には「一云人見豆良牟可」「一云大夫乃思多鶏備弖」という異伝があるが、当面の対象から除く。

次に、右の文字面をどう読むべきかが問題となる。最も新しい訓として、大系本・澤瀉注釈・古典文学全集本の三書を選び、その訓を比べてみても、少なからぬ相違がそこには認められる。問題となる個所は次の通り。

次頁の表には、「未通女児」をヲトメゴと訓むかヲトメコとするかという清濁の相違や、「わが思ふ」「あが思ふ」、「われに依る」「わに依る」というような、あ・わ・われの相違を含めなかった。にもかかわらず、十一首中十三個所の異訓をみる事実は、歌集旋頭歌に統一訓を求めることの困難さを示している。

訓の揺れは、第一に歌集旋頭歌の付属語表記の「不備」——もちろんわれわれの側から見てのことである——にもとづくだろう。A・B・C・D・E・G・H・I・J・Kの十例が、何らかの点で助詞や助動詞の扱い方にかかわっ

		本文	古典大系訓	澤瀉注釈訓	古典全集訓
A	②	蹈静子之手玉鳴裳	ふみしづむ子が手玉し鳴るも	ふみしづむ子がたたまし鳴るも	ふみしづむ子しただま鳴らすも
B	〃	所照公乎	照らせる君を	同　上	照りたる君を
C	〃	内等白世	内にと申せ	内へと申せ	内にと申せ
D	③	吾隠在妻	わが隠せる妻	同　上	かくしたる妻
E	④	隠在其妻	隠せるその妻	同　上	かくしたる妻
F	⑤	恵　得	うつくしと	うるはしと	同　上
G	⑥	将来得云者	来むとし言はば	来なむと言はば	同　上
H	〃	取置待	取り置き待たむ	取り置きて待たむ	同　上
I	⑦	早　起	つとに起き	はやく起きて	はやく起き
J	⑧	雖　生	生けりとも	同　上	生けれども
K	⑪	天　在	天にある	あめなる	同　上
L	〃	妻所云	妻がりといへば	妻がりといはば	同　上
M	〃	足壮厳	足よそひせむ	足をかざらむ	あしかざりせむ

ていることが、それを端的に表わす。第二に、歌集旋頭歌の詞の表記にみられる文字遣いの特殊性にもよるであろう。表中、Fの「恵」、Mの「壮厳」は万葉集内に同類の用法の求めがたいものである。恵は「愛」と同義とされ、ウツクシ・ウルハシの二訓が考えられるが、歌意からいうと、古典文学全集本の注に記すようにウルハシがふさわしいかもしれない。壮厳は仏典語といわれる。ヨソフと訓むにせよ、カザルと訓むにせよ、万葉集の他の部分では餝(三三二四)・装(二〇五八)・装束(一九九・四七五・三一一二)などと書かれている語が、ここでは珍しい文字表記をとっていることになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com